

Title	毛宗崗本『三国志演義』の特徴： 曹操臣下の文官における人物描写の比較の試み
Sub Title	Mao Zonggang's characteristics in his critical comments of Sanguo yanyi : focused on Caocao's civil subjects
Author	鵜浦, 恵(Unoura, Megumi)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.3 (2019. ) ,p.1- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥野信太郎先生没後五十年記念特集号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 毛宗崗本『三国志演義』の特徴

——曹操臣下の文官における人物描写の比較の試み——

鴉 浦 恵

## 一 はじめに

現代においても日中間わず広く読まれている『三国志演義』は、元末明初の人である羅貫中がまとめた歴史白話小説である。その祖本は失われ、現存する最古の版本としては明代の嘉靖元年（一五二二）に出版された『三国志通俗演義』（以下、嘉靖本と称する）があるが、他にも様々な版本が多くの地域、版元から出版されており、その内容も多岐にわたっている<sup>1</sup>。その中で最終的に通行本としての地位を確立したのは、嘉靖本の流れを汲む『李卓吾先生批評三国志』（以下、李卓吾本と称する）を底本とし、清代初期に毛綸・毛宗崗父子がまとめた所謂「毛宗崗本」であった。

毛宗崗本には、毛宗崗自身によって書かれた「讀三國志法」が首巻に附されており、そこには毛宗崗本の特徴が記されている。特に人物描写については、三人の人物を「三絶」とし、彼らのような傑出した人物がいることによって、三国志が他の史書よりも優れていると述べている。「三絶」とは「智」絶の諸葛亮、「義」絶の関羽、そして「奸」絶の曹操である。また、同じく首巻に附されている「凡例」において、「俗本」を「古本」に基づいて改訂、修正したことを具体的な例と共に示しているが、「俗本」とは毛宗崗本以前のすべてのテキストのことであり、また「古本」は毛宗崗がこうあるべきと考えたテキストのことである。ここから、毛宗崗本が明確な意図をもって李卓吾本からの改変を行ったことが見て取れる。

1  
以上のように毛宗崗本が自ら示している特徴を前提として、仙石知子氏は毛宗崗本の表現技法について、さらに四

つの特徴を挙げている。

第一に人物像を一貫させ、第二に「三絶」を物語の中核に据え、第三に細部に至るまでの綿密な表現を行うことで、文学としての完成度の高さを持っていた。さらに、第四に当該時代の社会通念を利用する表現技法を用いることで、千五百年の時空を超えて、三国時代の物語を「現代」の物語として読者に理解させた<sup>④</sup>。

『三国志演義』は蜀漢を正統とし、漢王朝への忠誠心を主題とする物語であるが、仙石氏の指摘にあるように、毛宗崗本はその主題をさらに強調するために細部の表現にもこだわっているのである。では、上記のような毛宗崗本の特徴は、曹操や関羽といった物語の中心的な人物以外の描写にも影響を及ぼしているだろうか。例えば曹操の「奸」絶たる側面を強調し、人物像を一貫させるために、曹操だけではなく彼に関わる人物の言動にも毛宗崗本による意図的な改変が加えられていることも考えられる。そこで本稿では、李卓吾本と毛宗崗本の比較を通して、曹操臣下の文官における描写の改変に着目し、そこから毛宗崗本の特徴について改めて考察を試みたい<sup>⑤</sup>。

## 二 程昱に関する描写

曹操の周辺人物に着目しながら版本間の比較をする中で、登場する人物が入れ替わるという大きな異同が二か所見受けられた。入れ替わっていたのは曹操に仕える程昱と荀彧である。本章ではまずその入れ替わっている場面を比較し、その上で程昱に関して他の箇所で見られた異同についても、人物像という点に着目して考察する。

### (一) 第二十三、二十四回<sup>⑥</sup>

董承や吉平らの曹操に対する謀反が発覚し、献帝が董承に自ら手渡した血詔を読んだ曹操が、皇帝の廃立について参謀たちに相談する場面である。

【李卓吾本】

操回府、聚衆謀士。操出詔、令荀彧看。彧曰「明公今欲何如？」操曰「據此情理、正合誅其君而吊其民、擇有德者而立之。」彧曰「①主公威震四海、號令天下者、蓋有漢家苗裔故也。②征討有名、賞罰有制。古往今來、以絕議論。」操曰「欲將董承等四家誅之、必欲得正惡以示衆。」彧曰「丞相之意若何？」操曰「不誣之反、豈得誅族乎？」彧曰「事已至此、釋之恐難。」操意遂決、連夜收王子服等老小入官、明正叛逆之罪。次日、押送各門處斬。良賤皆死共七百餘人。城中官民無不下淚。

【毛宗崗本】

操回府以詔狀示衆謀士商議、要廢獻帝、更立新君。正是數行丹詔成虛望、一紙盟書惹禍殃。未知獻帝性命如何、且聽下文分解。

卻說曹操見了衣帶詔、與衆謀士商議、欲廢却獻帝、更擇有德者立之。程昱諫曰「①明公所以能威震四方、號令天下者、以奉漢家名號故也。②今諸侯未平、遽行廢立之事、必起兵端矣。」操乃止。只將董承等五人、并其全家老小、押送各門處斬。死者共七百餘人。

太字で示したように、曹操に進言する臣下が李卓吾本では荀彧、毛宗崗本では程昱と入れ替わっている。人物の入れ替わり自体は珍しいことではないが、このように台詞を伴うような場面における入れ替えは他にはあまり見られない。毛宗崗本は全体的に李卓吾本よりも表現が簡素になっており、先に触れた「凡例」においても「俗本」の冗長でわかりにくい言葉をわかりやすく改めたと記しているため、文章の多寡だけでは比較できないが、傍線部①には明確な文意の違いが見られる。曹操が天下に権威を持っていることについて、李卓吾本で荀彧は「漢王朝の末裔を守っていることによる」と言っているのに対し、毛宗崗本で程昱は「漢王朝を奉るという名分による」としており、「苗裔」「名號」という言葉の違いから、李卓吾本の皇帝の血縁を重んじる荀彧と、毛宗崗本の名のみを重んじる程昱という対比が見られる。また、二重傍線部②においては、李卓吾本では荀彧が「征伐に名分があり、賞罰に規定が有ることで古今の議論を絶つことができる」と漢王朝を守ることの重要性を説くのに対し、毛宗崗本では程昱が「今はまだ諸侯を

平定していないのに、急に廃立のを実行するならば、必ずや武装蜂起を招くでしょう」とその後曹操が皇帝の廢立に携わる、或いは帝位を篡奪することを暗に認めるような発言をしているのである。

## (二) 第二十四回

曹操が董承や王子服、董貴妃らを誅殺したのち、獻帝の血詔に名前が載っていた馬騰と劉備への対策について、臣下に相談する場面である。

### 【李卓吾本】

操與荀彧曰「今戮董承等千餘人、去吾心腹大患。尚有馬騰、劉備、亦在此數、不可不誅。」荀彧曰「馬騰見屯軍于西涼、未可輕取。但以書慰勞、勿使生疑焉、徐誘入京師圖之可也。劉備見在徐州、分布犄角之勢、亦不可輕敵。」操曰「何爲未可也？」彧曰「與明公爭天下者、袁紹也。今紹屯兵官渡、常有圖許都之心。一旦若東征劉備、備必求救于袁紹。若紹乘虛而襲、何以當之？」操曰「非也、彼劉備乃人傑也。今若不擊之、待其羽翼長成、急難搖動、必爲後患。袁紹雖有大志、事多懷疑不決、必不動也、何必憂乎。」彧曰「紹雖不才、田豐、沮受、審配、郭圖、許攸、逢紀之輩、皆有奇謀高見、倘紹信之、爲禍不輕矣。」操猶豫未決、忽見郭嘉自外而入。

### 【毛宗崗本】

操謂程昱曰「今董承等雖誅、尚有馬騰、劉備亦在此數、不可不除。」昱曰「馬騰屯軍西涼、未可輕取。但當以書慰勞、勿使生疑、誘入京師圖之可也。劉備現在徐州、分布犄角之勢、亦不可輕敵。況今袁紹屯兵官渡、常有圖許都之心。若我一旦東征、劉備勢必求救於紹。紹乘虛來襲、何以當之？」操曰「非也、備乃人傑也。今若不擊、待其羽翼既成、急難圖矣。袁紹雖強、事多懷疑不決、何足憂乎？」正議間、郭嘉自外而入。

ここでも版本間で荀彧と程昱が入れ替わっているが、それぞれの会話は毛宗崗本の方が簡潔になってはいるものの、内容には大きな変化が見られない。前の場面からの一連の流れに合わせ、登場人物の辻褄を合わせていると考えられ

る。

(一)で示したように、ここではただ人物が入れ替わっているだけではなく、漢王朝に対する立場に関しても改変が加えられており、毛宗崗本では程昱の反蜀漢の立場が強調されている。続く(二)の場面でも(一)との整合性が図られていることから、毛宗崗本が意図的に行ったものではないかと考えられるが、では他に程昱の人物像に対する改変は行われているのだろうか。

### (三) 第二十一回

郭嘉と程昱が領地の視察から帰り、それまで曹操の下にいた劉備が袁術征伐に出たことを知って、曹操に劉備の後を追うよう勧める場面である。

#### 【李卓吾本】

時郭嘉考較錢糧方回、知曹公已遣玄德進兵徐州、慌入諫曰「丞相令劉備督軍何意？」操曰「欲截袁術耳。」程昱曰「昔日劉備爲豫州牧時、某等①來諫、丞相不聽。今日又與之兵乃放龍入海、縱虎歸山。後欲治之、其可得乎？」郭嘉曰「②備有雄才、又得民心、關、張皆有萬人之敵也。以嘉觀之、非久爲人之下者、其謀不可測也。古人言『一日縱敵、萬世之患。』今以兵與之、如虎添翼也。丞相可察之。」操曰「吾觀劉備閑中學圃、醉後畏雷、亦非成事業之人、何憂之有？」程昱曰「學圃者、故瞞丞相耳。畏雷聲者、非其本情也。丞相明照天下、何被劉備瞞過？」操頓足曰「吾被此人欺詐、何人與吾星夜擒之？」一人昂然而出曰「某只用五百軍、縛劉備、關、張、獻于府下。」此人是誰、且聽下回分解。

要去趕玄德者、乃虎賁校尉許褚也。操大喜、遂命許褚帶領五百軍、連夜來趕。

#### 【毛宗崗本】

時郭嘉、程昱考較錢糧方回、知曹操已遣玄德進兵徐州、慌入諫曰「丞相何故令劉備督軍？」操曰「欲截袁術耳。」程昱曰「昔劉備爲豫州牧時、某等①請殺之、丞相不聽。今日又與之兵、此放龍入海、縱虎歸山也。後欲治之、其可得

乎?」〔程昱直欲殺備。〕郭嘉曰「②丞相縱不殺備、亦不當使之去。古人云『一日縱敵、萬世之患。』望丞相察之。」〔郭嘉只欲留備。〕操然其言、遂令許褚將兵五百前往、務要追玄德轉來。許褚應諾而去。

まず程昱の台詞のうち、傍線部①のところ、以前劉備が豫洲の牧に封じられた際の程昱の反応について、李卓吾本ではただ「諫めに来た」と述べているのに対し、毛宗崗本では「劉備を殺すように勧めた」と述べており、毛宗崗本ではより程昱の劉備に対する殺意が強調されている。続いて、二重傍線部②は郭嘉の台詞だが、李卓吾本で郭嘉は劉備の才能や関羽、張飛の武勇についてその危険性をはっきりと述べているのに対し、毛宗崗本では「たとえ殺さずとも、劉備を行かせるべきではなかった」と劉備に対する警戒心が薄められている。さらにこの改変に付随して、太字で示してあるように毛宗崗本は「程昱はただ劉備を殺したいと思っている」「郭嘉はただ劉備を留まらせておきたいと思っている」と評をつけることで、自身が行った改変に対して、その違いをはっきりと述べている。この場面において、毛宗崗本では程昱の反劉備・反蜀漢の立場が、郭嘉との対比によってより明確になっていると言えよう。

#### (四) 第二十五回

関羽が曹操方に投降したのち、袁紹との戦いにおいて袁紹方の顔良に苦戦し、程昱が関羽を出陣させるよう曹操に勧める場面である。

##### 【李卓吾本】

操見連折二將、心中憂悶。程昱曰「吾舉一人可敵顏良。」操問是誰、昱曰「非關公不可。」操曰「吾恐他立了功便去。」昱曰「丞相又愛之、又疑之、何不取來、兩強相併?如勝則重用、敗則決疑。」操曰「善。」遂差人去請關公。公聞知來請、大喜、遂辭二嫂。二嫂曰「叔今此去、可打聽皇叔消息。」公曰「吾專爲此事。」急急要去。

##### 【毛宗崗本】

操見連折二將、心中憂悶。程昱曰「某舉一人、可敵顏良。」操問是誰。昱曰「非關公不可。」操曰「吾恐他立功便去。」

昱曰「劉備若在必投袁紹。今若使雲長破袁紹之兵、紹必疑劉備而殺之矣。備既死、雲長又安往乎？」〔是直欲借雲長之手以殺玄德也、昱之計亦譎矣哉！〕操大喜、遂差人去請關公。關公即入辭二嫂。二嫂曰「叔今此去、可打聽皇叔消息。」

傍線部で示した程昱の台詞、李卓吾本では「丞相が関羽をかくも愛し、また疑いもするのなら、どうして顔良と戦わせないのでか。関羽が勝てば重用すればよいし、負ければ疑惑を解くことができます」と関羽と曹操のことについてのみ述べている。それに対して、毛宗崗本では「関羽に袁紹の兵を打ち破らせれば、袁紹はきつと劉備を疑って殺すでしょう。劉備が死んでしまつては、関羽はどこにも行けませんまい」と関羽のことだけでなく、劉備のことについても言及する内容が変わっている。さらに毛宗崗本はこの改変について、太字で示したように程昱の発言を「これはただ関羽の手を借りて劉備を殺そうとしているのである。程昱の計略もまたざる賢いものだ」と評している。つまり、毛宗崗本では程昱の狡猾さを強調するような改変がなされているのである。

## (五) 第二十一回

許褚が曹操に命じられ、許都を去つた劉備を追いかけていった場面である。

### 【李卓吾本】

卻說關、張正行之次、只見塵頭起、謂玄德曰「此必是曹公追兵至也。」遂下定營寨圍繞、令關、張各執軍器、立于兩邊。許褚至近、見嚴整甲兵、入見玄德。玄德曰「校尉來此何幹？」褚曰「丞相命、特來請將軍回、別有商議。」玄德曰「將在外、君命有所不受」吾面君、況又蒙丞相之一語乎。你回去、替我稟覆丞相有程昱、郭嘉累問我取金帛、不曾相贈、因此于丞相前以讒言譖我、故令汝趕來擒吾。吾若是無仁無義之輩、就此處砍爲肉泥。吾感丞相大恩、未嘗忘也、汝當速回、善言答之。」許褚觀見關、張以目視之、連聲應諾而退。遂行。許褚回見曹操、將玄德言語細說了一遍。操喚程昱、郭嘉、責之曰「汝于劉備處覓金帛不從、因此含冤于心、每于吾前讒言譖之、此何理也？」程昱、郭嘉以頭頓于地曰「丞相又被他瞞過了也。」操笑曰「彼既去矣、若再追、恐成怨恨吾。不怪汝等、汝等勿疑。」二人辭去。此事曹公

半疑半信。

【毛宗崗本】

卻說玄德正行之間、只見後面塵頭驟起、謂關、張曰「此必曹兵追至也。」遂下了營寨、令關、張各執軍器立于兩邊。許褚至、見嚴兵整甲、乃下馬入營見玄德。玄德曰「公來此何幹？」褚曰「奉丞相命、特請將軍回去、別有商議。」玄德曰「將在外、君命有所不受。」吾面過君、又蒙丞相鈞語、今別無他議、公可速回、爲我稟覆丞相。」許褚尋思「丞相與他一向交好、今番又不曾教我來廝殺、只得將他言語回覆、另候裁奪便了。」遂辭了玄德、領兵而回。回見曹操、備述玄德之言。操猶豫未決。程昱、郭嘉曰「備不肯回兵、可知其心變矣。」操曰「我有朱靈、路昭二人在彼、料玄德未敢心變。況我既遣之、何可復悔？」遂不復追玄德。

この場面では、傍線部で示したように、李卓吾本では劉備が追いかけてきた許褚を誤魔化すために、「程昱と郭嘉が何度も賄賂を要求したのに応えなかったため、曹操に讒言した」というような嘘をついており、曹操も許褚からこのことを聞いて程昱と郭嘉に疑いを持ち、二人を問いただしているが、毛宗崗本ではそのような発言は削除されている。このこの改変は(四)までに見てきた程昱の人物像における負のベクトルの改変と異なり、正のベクトルの改変のような印象を受けるが、劉備が嘘をついたという行為が削除されることで、劉備の「仁」の側面が担保されており、毛宗崗本では劉備の描写の方に意を用いたのである。<sup>11)</sup>脇役よりも物語の中心人物に対する表現を優先させていることは当然考えられる。似たような事例はもう一つある。

## (六) 第二十七回

関羽が劉備の居場所を知り、曹操に断りなく許都を去っていったことを曹操及び臣下たちが知った場面である。

【李卓吾本】

曹操部下、諸將中只有蔡陽不服關公、常有讒譖之意、故要去趕。操曰「事主不忘其本、乃天下之義士也。來去明白、

乃天下之丈夫也。汝等皆可效之。」後史官覽關公傳而言曰「兩盡其忠、世稱義勇。」遂賦詩曰（中略）

程昱曰「關某不辭丞相、不奉鈞旨、何如？」操曰「使歸故主、以全其義。」程昱曰「丞相能捨之、諸將皆不平也。」操曰「何爲不平？」昱曰「關某有三罪、以致衆怒。且關某昔日在下邳、事急來降、丞相拜爲偏將軍、三日一小宴、五日一大宴、上馬金、下馬銀。雖建微功、即拜壽亭侯之職、恩榮極矣。一旦棄丞相而去、不能盡忠。其罪一也。不得丞相之命、飄然便行、欲殺門吏、不遵國法。其罪二也。知故主之微恩、忘丞相之大德、亂言片楮、冒瀆鈞威。其罪三也。今關某若歸袁紹、是縱虎傷人也。不若遣蔡陽趕上誅之、絕此後患。」操曰「不然。吾昔日曾許之、今日故捨之。若追而殺之、天下人皆言我失信。彼各爲其主、勿追也。」遂喝退。後史官裴松之評曰（中略）

程昱曰「雲長不辭而去、終是缺禮。」操曰「彼曾到相府二次、被吾避之。吾所賜金帛皆留還我、此雲長乃千金不可易其志、真仗義疏財大丈夫也。此等之人、吾深敬之。」程昱曰「久後爲禍、丞相休怨。」操曰「雲長非負義之人也。彼各爲主、豈容人情耶？想雲長此去不遠、吾一發結識他、做箇大人情。先遣張遼去請住他、我與他送行、將一盤金銀爲路費、一領紅錦袍作秋衣、教他時時想我。」程昱曰「雲長必不回來。」曹操曰「吾引數十騎去、使張遼單騎先去請。」

#### 【毛宗崗本】

卻說曹操部下諸將中、自張遼而外、只有徐晃與雲長交厚、其餘亦皆敬服。獨蔡陽不服關公、故今日聞其去、欲往追之。操曰「不忘故主、來去明白、真丈夫也。汝等皆當效之。」遂叱退蔡陽、不令去趕。程昱曰「丞相待關某甚厚。今彼不辭而去、亂言片楮、冒瀆鈞威、其罪大矣。若縱之使歸袁紹、是與虎添翼也。不若追而殺之、以絕後患。」操曰「吾昔已許之、豈可失信？彼各爲其主、勿追也。」因謂張遼曰「雲長封金掛印、財賄不足以動其心、爵祿不以其志、此等人吾深敬之。想他去此不遠、我一發結識他做個人情。汝可先去請住他、待我與他送行、更以路費征袍贈之、使爲後日記念。」張遼領命、單騎先往。曹操引數十騎隨後而來。

この場面では傍線部で示したように、曹操の元を去っていった関羽について李卓吾本では関羽の「罪」について、程昱が「三つの罪」として具体的に述べている。一方、毛宗崗本では簡潔な台詞になっている。もちろん毛宗崗本が簡潔な表現を心掛けているという傾向もあるが、ここで他の所では強調されていた程昱の反蜀漢の立場が和らぐよう

な改変となつてゐるのは、毛宗崗本が関羽を「義」絶として一貫して描こうとする意図も働いてゐるのではないだろうか。ここでもやはり程昱よりも、関羽の人物像が優先されている。

ここまで、程昱に対して毛宗崗本で行なわれている改変を見てきたが、(一)から(四)に見られるように、毛宗崗本では程昱が反蜀漢であり、また狡猾な人物として李卓吾本よりもはっきりと描かれており、負のベクトルで人物像に改変が行われてゐると言えよう。ただし、(五)(六)に挙げた改変から、毛宗崗本はその傾向よりも、劉備の「仁」や関羽の「義」を強調し、彼らの人物像に一貫性を持たせることを優先していることがわかる。では、程昱以外の人物ではどうであろうか。

### 三 荀彧に関する描写

前章ですでに述べたように、毛宗崗本の第二十四回で荀彧は程昱に書き換えられており、その改変を通して毛宗崗本は程昱の人物像を表現していた。本章では、その場面では描かれなかつた荀彧の人物像に関して、他の場面から毛宗崗本の特徴を探る。

#### (一) 第十八回

張繡征伐に失敗して許都に戻つた後、袁紹からの書簡を見て「無礼な手紙を送つて来た袁紹を討伐したいが、力が及ばない」と嘆く曹操に、郭嘉が「道・義・治・度量・謀・徳・仁・明・文・武の要素で袁紹より勝つてゐる」と述べる場面である。

#### 【李卓吾本】

操還許都、荀彧出迎。操入見天子、説稱孫策有功、封爲討逆將軍、贈爵吳侯、遣使齎詔江東去、令策破劉表。操回府、衆官皆聚。荀彧問曰「丞相到安衆、何以知其必勝也？」操曰「彼退無歸路、必用死戰。吾寬暗以圖之、此孫子之

玄妙也、吾以是知其勝也。」①荀彧拜服而去。

郭嘉入、操曰「公來何暮也？」(中略)嘉曰「劉、項之不敵、公所知。漢祖惟智勝、項羽雖強、終被漢祖擒之、惟智勝也。如嘉竊料之、紹有十敗、公有十勝、紹兵雖強、無能爲也。(中略)公有十勝之德、紹安可望也？」操曰「如公所言、孤何德以勸之也。若此、紹可圖也。」嘉曰「徐州呂布、實心腹之大患也。今紹北征公孫瓚、乘此人遠去、不若先取呂布、掃除東南、然後圖紹、未爲晚矣。若便圖紹、呂布必來救援、許都爲禍不淺矣。」操然之。

②當夜、便召荀彧入後堂、曰「汝知袁紹動靜乎？」彧曰「今日有使至、不知何事。」操以書令荀彧看之。看畢、曰「紹辭語大不遜也。」操曰「吾欲興兵討之、恨力不及耳、何如？」彧曰「古之成敗者、誠有其才、雖弱必強。苟非其人、雖強必弱、劉、項之存亡、足以觀矣。今與公爭天下者、惟袁紹耳。紹外貌寬而內忌、任人而疑其心。公明達不拘、惟才所宜、此度勝也。紹遲重少決、失在後機。公能斷大事、應變無窮、此謀勝也。紹御軍寬緩、法令不立、士卒雖衆、其實難用。公法令既明、賞罰必行、士卒雖寡、皆爭致死、此武勝也。紹憑世資、從容飾智、以收名譽、故士之寡能好問者多歸之。公以至仁待人、推誠心、不虛美、行己謹儉、而與有功者無所吝惜、故天下忠正效實之士咸願爲用、此德勝也。夫以四勝輔天子、仗義征伐、誰敢不從？袁紹之輩、何能爲用哉！」操曰「卿頌吾德、何以當之？然此、可以興兵征伐。」彧曰「未可。今呂布見在徐州、常懷不仁。欲伐袁紹、布必乘虛。不如以書安袁紹之心、加紹顯官、許糧千斛、乘彼有事于公孫瓚之時、先滅呂布、中原十有六也。然後紹一舉而可擒也。」操撫掌大笑曰「奉先之機、文若之智、雖陳平、張良、何可比也！」遂議東征呂布。

【毛宗崗本】

操還許都、表奏孫策有功、封爲討逆將軍、賜爵吳侯。遣使賈詡江東、諭令防勸劉表。操回府、衆官參見畢、荀彧問曰「丞相緩行至安衆、何以知必勝賊兵？」操曰「彼退無歸路、必將死戰、吾緩誘之而暗圖之、是以知其必勝也。」①荀彧拜服。

郭嘉入。操曰「公來何暮也？」(中略)嘉曰「劉、項之不敵、公所知也。高祖惟智勝、項羽雖強、終爲所擒。今紹有十敗、公有十勝。紹兵雖強、不足懼也。(中略)公有此十勝、於以敗紹無難矣。」操笑曰「如公所言、孤何足以當之。」

②荀彧曰「郭奉孝十勝十敗之說、正與愚見相合。紹兵雖衆、何足懼耶！」嘉曰「徐州呂布、實心腹大患。今紹北征

公孫瓚、我當乘其遠出、先取呂布、掃除東南、然後圖紹、乃爲上計。否則我方攻紹、布必乘虛來犯許都、爲害不淺也。」操然其言、遂議東征呂布。

荀彧の描写について、版本間で大きな異同が見られたのはこの一か所のみである。違いとしては、まず傍線部①のところで、李卓吾本では荀彧は郭嘉がやってくる前に曹操のもとを去っているが、毛宗崗本では「而去」の文字を削除し、荀彧がその場に留まっているような表現になっている。また二重傍線部②、李卓吾本では一度荀彧が去った後、夜に再び曹操の所に来て郭嘉と同じように袁紹と比較しながら曹操を褒めたたえている。それに対して、毛宗崗本では郭嘉の発言にその場で賛同の意を表しているだけであり、荀彧自身の論としては展開させていない。郭嘉の台詞の分量については、毛宗崗本は李卓吾本から分量を減らしてはいるものの、内容はほぼ変わらないので、これは単純に文章を簡潔にする意図によるものであろう。荀彧の方の台詞が削除されていることについても内容の重複を避けたのだろうが、毛宗崗本は荀彧が曹操を直接褒めたたえる台詞を削除することで、李卓吾本よりも荀彧と曹操の距離感が遠い印象を与えている。ただし、この箇所だけでは、毛宗崗本が荀彧をどう描こうとしているかを判断しきれないが、荀彧に関する評に毛宗崗本の立場が表れている。

## (二) 毛宗崗本による評

### ①【毛宗崗本】第十二回 総評

荀文若曰「河濟之地、昔之關中、河内也。」是隱然以高祖、光武之所爲教曹操矣。待其後自加九錫而惡其不臣、豈始既教之、而後復惡之耶？坡公稱文若爲聖人、吾未敢信。

### ②【毛宗崗本】第六十一回 総評

荀彧之死、或以殺身成仁美之者、非也。初之勸操取兗州、則比之於高、光。繼之勸操戰官渡、則比之於楚、漢。凡其設策定計、無非助操僭逆之謀。杜牧譏其教盜穴牆發櫃者、誠爲至論矣。既以盜賊之事教之、後乃忽以君子之論諫之、

何其前後之相謬耶？蓋彧之失在從操之初、而欲蓋之以晚節、毋乃爲識者所笑？

③【毛宗崗本】第六十一回

侍中荀彧曰「不可。丞相本興義兵、匡扶漢室、當秉忠貞之志、守謙退之節。君子愛人以德、不宜如此。」〔荀彧向爲曹操心腹、今日忽然作此等語、是教曹操以淡也。董昭淡而不淡、荀彧不淡而假淡、可發一笑。〕曹操聞言、勃然變色。董昭曰「豈可以一人而阻衆望？」遂上表請尊操爲魏公、加九錫。〔操願書墓道曰「曹侯之墓」、今則與此言大不相同。〕荀彧嘆曰「吾不想今日見此事！」操聞、深恨之、以爲不助己也。建安十七年冬十月、曹操興兵下江南、就命荀彧同行。彧已知操有殺己之心、託病止於壽春。忽曹操使人送飲食一盒至、〔曹操有九錫、荀彧只有一錫。〕盒上有操親筆封記。開盒視之、並無一物。彧會其意、遂服毒而亡。〔漢文帝賜食於周亞夫而不設箸、是猶有食也。今操以空盒賜荀彧、是并食亦無有矣。明是使彧絕食之意、彧安得不死乎？〕年五十歲。

④【毛宗崗本】第六十六回

曹操覽之、遂罷南征、興設學校、延禮文士。於是侍中王粲、杜襲、衛凱、和洽四人、議欲尊曹操爲魏王。中書令荀攸曰「不可。丞相官至魏公、榮加九錫、位已極矣。今又進陞王位、於理不可。」〔荀彧諫九錫已晚矣、荀攸不諫九錫而諫稱王、抑又晚矣。〕曹操聞之、怒曰「此人欲效荀彧耶？」〔又將前事一提。〕荀攸知之、憂憤成疾、臥病十數日而卒、亡年五十八歲。操厚葬之、遂罷魏王事。〔姑徐徐云爾、未必因荀攸之諫而遂止也。〕

⑤【毛宗崗本】總評 第十回

曹操以荀彧爲「吾之子房」、是隱然以高祖自待矣。何至加九錫而始知其有不臣之心乎？文若不於此時疑之、直至後日而始疑之、惜哉、見之不早也！

⑥【毛宗崗本】總評 第六十六回

荀彧以操之加九錫而死、荀攸以操之稱魏王而死、君子惜其不死於殺董妃之時、以爲死之已晚也。然尤幸其能死於弑伏后之前、以爲死之未晚也。夫殺董妃則加九錫、稱魏王之漸也、稱魏王則弑伏后之本也、弑伏后則篡國之機也。乃加九錫則董昭勸之、稱魏王則王粲贊之、弑伏后則華歆助之、是彧與攸之爲人、其猶有賢於董昭、王粲、華歆者耶！

右に傍線を引いて挙げたのは全て毛宗崗本による荀彧の人物像に対する評である。まず①から④の評では、荀彧が漢王朝を守る意思は持っていたものの、長らく曹操のために献策し続けていることを指摘し、曹操が九錫を受けることを諫めたのは時期が遅すぎると批判的な評をつけている。しかし、⑤の荀彧の初登場の回における総評では、荀彧が曹操を疑うのが遅かったことを惜しみ、⑥では曹操の篡奪を支持した董昭や王粲、華歆らと比べて荀彧及び甥の荀攸を評価しているというように、毛宗崗本の中で荀彧に対する評価には揺れが見られる。少なくとも、曹操の篡奪に反対し諫めた点については、評価の対象となっているのである。これは明確な傾向をもって本文に改変が加えられていた程昱とは対照的なものとなっている。なお、程昱についてはこのような人物像に関してはつきりと述べた評は見受けられなかった。

さて、ここまで述べてきた点から程昱と荀彧を比較すると、まず毛宗崗本は「奸」絶たる曹操の臣下として、二人とも高い評価を与えてはいないのは確かである。しかし、漢王朝との距離感という視点から、曹操の篡奪を支持する程昱は、より曹操という奸雄に近い狡猾な人物として、また荀彧は曹操の協力者となっていたものの、曹操との距離感を程昱より遠く置くなど、漢王朝への忠義を抱いていた人物として、同じ曹操の臣下の中でもその差を意識して描き分けていると考えられる。

#### 四 賈詡に関する人物描写

版本間で人物像に異同が見られた曹操臣下の人物には、他に賈詡が挙げられる。本章では、荀彧に対する評価の鍵となった漢王朝との距離感という観点から、その異同について考察を試みる。

## (一) 第七十九回

曹丕が魏王の位についた後、瑞祥が現れたとして家臣たちが猷帝に対して帝位を曹丕に譲るように勧めに行く場面である。

## 【李卓吾本】

八月間、報稱石邑縣鳳凰來儀、臨淄城麒麟出現、黃龍現於鄴郡。丕手下百官商議曰「今上天垂象、乃魏當代漢也。可安排受禪之禮、令漢帝將天下讓與魏王。」①時有侍中劉廙、字恭嗣、乃南陽安衆人也。侍中辛毗、字佐治、乃潁川陽翟人也。侍中劉曄、字子暘、乃淮南城德人也。尚書令桓階、字伯緒、乃長沙臨湘人也。尚書令陳矯、字季弼、乃廣陵東陽人也。尚書令陳群、字長文、乃潁川許昌人也、這一班文武官僚、四十餘人、皆來見太尉賈詡、相國華歆、御史大夫王朗、共言此事。②賈詡笑曰「公等所見、正合吾機。」當日、華歆同賈詡王朗中郎將李伏、太史丞許芝、引文武多官直入內殿、來奏漢獻帝、禪位於魏王曹丕。未知如何？且聽下回分解。

## 【毛宗崗本】

是歲八月間、報稱石邑縣鳳凰來儀、臨淄城麒麟出現、黃龍現於鄴郡。於是中郎將李伏、太史丞許芝商議種種瑞徵、乃魏當代漢之兆、可安排受禪之禮、令漢帝將天下讓與魏王。①遂同華歆、王朗、辛毗、賈詡、劉廙、劉曄、陳矯、陳群、桓階等、一班文武官僚、四十餘人、直入內殿、來奏漢獻帝、請禪位於魏王曹丕。正是魏家社稷今將建、漢代江山忽已移。未知獻帝如何回答、且看下文分解。

傍線部①において、李卓吾本では劉廙や辛毗らが瑞祥を見て賈詡、華歆、王朗に会いに来るが、毛宗崗本では最初から彼らを含めた文武の官僚がそのまま猷帝の下に行っている。また二重傍線部②にあるように、李卓吾本では相談に来た劉廙らに対して賈詡が「君たちの意見はまさに私の考えと一致する」と笑いながら賛同する場面があるが、毛宗崗本では削除されており、李卓吾本に比べて賈詡の主体性が薄まっていると言えよう。

## (二) 第八十回

文武の官僚らが献帝に帝位を譲るよう勧めた翌日、再び献帝に迫る場面である。

## 【李卓吾本】

帝顛慄不已。只見階下披甲持戈數百餘人、皆是魏兵、帝乃流涕出血、嘆曰「祖宗天下、何期今日廢之！朕死於九泉之下、有何面目見先帝乎。」泣告群臣曰「朕願將天下禪於魏王、幸留殘喘、以終天年。」賈詡曰「臣等安敢負陛下也？陛下可急降詔以安衆心。」帝哭聲不絕、乃令桓階、陳群草禪國之詔、令華歆齎捧詔璽、引百官直至魏王宮獻納。於是曹不忻然而喜。

## 【毛宗崗本】

帝顛慄不已。只見階下披甲持戈數百餘人、皆是魏兵。帝泣謂群臣曰「朕願將天下禪於魏王、幸留殘喘、以終天年。」賈詡曰「魏王必不負陛下。陛下可急降詔、以安衆心。」帝只得令陳群草禪國之詔、令華歆齎捧詔璽、引百官直至魏王宮獻納。曹丕大喜。

この場面では、賈詡の台詞が李卓吾本の「わたくしどもがどうして陛下を裏切りましょうか」というものから、毛宗崗本では「魏王は決して陛下を裏切りません」というように主語が変えられている。ここでも賈詡の主体性が薄まるような改変となっている。

## (三) 第八十回

曹丕が禅讓を受けて帝位についた場面である。

## 【李卓吾本】

讀冊已畢、魏王曹丕即受八般大禮、登了帝位。賈詡引大小官僚朝於臺下。改延康元年爲黃初元年、國號大魏。丕傳

聖旨、普赦天下罪犯。諡父曹操爲太祖武德皇帝。華歆奏曰「天無二日、民無二主。既已交割天下、可令劉氏安置何地？」言訖、扶獻帝跪於臺下聽旨。賈詡奏曰「可以封爲公卿、即日便行。」丕遂封帝爲山陽公。

【毛宗崗本】

讀冊已畢、魏王曹丕即入殿位大禮、登了帝位。賈詡引大小官僚朝於臺下。改延康元年爲黃初元年。國號大魏。丕即傳旨、大赦天下。諡父曹操爲太祖武皇帝。華歆奏曰「天無二日、民無二主」。漢帝既禪天下、理宜退就藩服。乞降明旨、安置劉氏於何地？」言訖扶獻帝跪於臺下聽旨。丕降旨、封帝爲山陽公、即日便行。

ここでは、李卓吾本の「(獻帝を)公卿に封じて、即日行かせるのがよいでしょう」という賈詡の発言が毛宗崗本では削除されている。

以上のように、賈詡に関して言動に移動が見受けられたのは、いずれも曹丕が帝の位を篡奪する一連の場面である。獻帝から曹丕への形ばかりの禪讓に際し、李卓吾本に比べて毛宗崗本では、賈詡の主体性が薄まり、獻帝に対する態度が和らいでいることがわかる。毛宗崗本は曹操に獻策をする賈詡に対してやはり評価はしていないが、賈詡は李傕に仕えていた時、獻帝への忠誠心を見せており、獻帝すなわち漢王朝との距離感が毛宗崗本での描写に影響を与えているのではないかと考えられる。

以上、曹操に深く関わる人物である程昱と荀彧、賈詡について版本間での人物像の改変を見てきたが、毛宗崗本は一貫して曹操を「奸」絶として描いており、そのため曹操の臣下に対する毛宗崗本の評価もおしなべて低いのは確かである。しかし、その中でも毛宗崗本は全ての人物を一樣に描くのではなく、「漢王朝への忠誠心」を比較軸として、それぞれの人物の立場を描き分けられるように細やかに改変を加えていると考えられる。

## 五 曹操に対する反乱における人物描写の改変

本章では、前章で曹操臣下の評価の軸として指摘した「漢王朝への忠誠心」という点から、曹操の臣下ではなく、

曹操に反旗を翻した者の描写に關しても版本間で違いが見られるかを確認する。『三国志演義』では劉備も加わった董承らの計画をはじめとして、幾度も曹操に対する反乱が企図されては露見し失敗に終わっているが、その中で、版本間で大きく違いが見られたのは馬騰と黄奎による反乱(第五十七回)、及び伏完と伏皇后による反乱(第六十六回)の二つである。

## (一) 第五十七回

西涼から許都に召喚された馬騰が黄奎と組んで謀反を起こそうと計画する場面である。

### 【李卓吾本】

當年奉詔、乃帶次子馬休、馬鐵、兄子馬岱并全家老小、皆赴許昌。留長子馬超守邊。於路到京、先參見曹操、次日乃面君。操封馬騰爲偏將軍、馬休爲奉車都尉、馬鐵、馬岱皆爲騎都尉、就領關西軍馬、剋日出征、收復劉備。騰謝恩畢、未及起行。

一日、獻帝宣馬騰入內、登麒麟閣、共論舊日功臣。宣騰近前、屏退左右、帝曰「卿知汝先祖乎？」騰曰「臣祖伏波將軍、名列青史、深荷聖朝之大恩、豈不知之。」帝曰「汝能效汝祖、力扶漢室以誅逆賊乎？」騰曰「臣已領聖旨去討反賊劉備也。」帝曰「劉備乃漢室宗親、非反賊也。反賊者、曹操也、早晚必篡朕位矣。所降詔旨、皆非朕意。卿思乃祖、何不與朕圖之？」騰含淚奏曰「臣昔奉衣帶詔、與國舅同謀殺賊、不幸事泄。非無此心、力不及耳。」帝曰「朕畏曹操、度日如年。今操付以兵權、可就而謀之、勿復泄漏。」騰曰「臣願以全家報陛下。」帝大喜。騰欣然領命而出、遂與三子商議、皆有報國之心。忽值曹操催督起軍、又遣門下侍郎黃奎爲行軍參謀。馬騰請黃奎議行兵之事、置酒痛飲。

### 【毛宗崗本】

當日奉詔、乃與長子馬超商議曰「吾自與董承受衣帶詔以來、與劉玄德約共討賊、不幸董承已死、玄德屢敗。我又僻處西涼、未能協助玄德。今聞玄德已得荊州、我正欲展昔日之志、而曹操反來召我、當是如何？」馬超曰「操奉天子之命以召父親、今若不往、彼必以逆命責我矣。當乘其來召、竟往京師、於中取事、則昔日之志可展也。」

馬騰兄子馬岱諫曰「曹操心懷叵測、叔父若往、恐遭其害。」超曰「兒願盡起西涼之兵、隨父親殺入許昌、爲天下除

害、有何不可？」騰曰「汝自統羌兵保守西涼、只教次子馬休、馬鐵并姪馬岱隨我同往。曹操見有汝在西涼、又有韓遂相助、諒不敢加害於我也。」超曰「父親若往、切不可輕入京師。當隨機應變、觀其動靜。」騰曰「吾自有處、不必多慮。」於是馬騰乃引西涼兵五千、先教馬休、馬鐵爲前部、留馬岱在後接應、迤邐望許昌而來。離許昌二十里、屯住軍馬。曹操聽知馬騰已到、喚門下侍郎黃奎吩咐曰「目今馬騰南征、吾命汝爲行軍參謀、先至馬騰寨中勞軍、可對馬騰說、西涼路遠、運糧甚難、不能多帶人馬。我當更遣大兵協同前進。來日教他入城面君、吾就應付糧草與之。」奎領命來見馬騰。騰置酒相待。

傍線部で示したように、馬騰が曹操を討つ動機について、李卓吾本では獻帝が馬騰を呼び出し直接依頼して初めてその意思を見せる。しかし、毛宗崗本では毛宗崗本では西涼にいる段階ですでに曹操を討つことについて言及しており、漢王朝に対する忠誠心がより強調されている。

## (二) 第五十七回

黄奎が愛妾である李春香に計画を漏らし、愛妾との婚姻を望む義弟の苗澤によって曹操に密告され、事が露見し、黄奎と馬騰親子が処刑される場面である。

### 【李卓吾本】

① 卻說關西兵至許昌、馬騰、黄奎請操點軍、並入相府。操喝左右拿下馬騰。② 騰曰「何罪？」操曰「吾保汝爲將、汝反欲殺吾耶？」二人抵語。操喚苗澤一證、黄奎無言可答。馬騰大罵曰「腐儒誤我大事矣！吾兩番欲殺國賊、不幸泄漏、此蒼天欲興姦賊而滅炎漢也！」操下令、將黄奎馬騰兩家良賤、共三百餘口、皆斬於市。曹、馬騰、二子對面受刑、關西兵士大叫「哀哉！」操喝散、只走了姪兒馬岱。

### 【毛宗崗本】

次日、①馬騰領著西涼兵馬、將次近城、只見前面一簇紅旗、打著丞相旗號。馬騰只道曹操自來點軍、拍馬向前。忽

聽得一聲砲響、紅旗開處、弓弩齊發。一將當先、乃曹洪也。馬騰急撥馬回時、兩下喊聲又起。左邊許褚殺來、右邊夏侯淵殺來、後面又是徐晃領兵殺至、截斷西涼軍馬、將馬騰父子三人困在核心。馬騰見不是頭、奮力衝殺。馬鐵早被亂箭射死。馬休隨著馬騰左衝右突、不能得出。二人身帶重傷、坐下馬又被箭射倒、父子二人俱被擒。曹操教將黃奎與馬騰父子、一齊綁至。②黃奎大叫「無罪！」操教苗澤對證。馬騰大罵曰「豈儒誤我大事！我不能爲國殺賊、是乃天也！」操命牽出。馬騰罵不絕口、與其子馬休、及黃奎一同遇害。

傍線部①のところ、馬騰が捕らわれる経緯について、李卓吾本では相府に入ったところを馬騰、黄奎共に捕らえられているが、毛宗崗本では曹操が馬騰ら西涼軍を急襲し、戦いの中息子一人を失い、馬騰自身も重傷を負いながら捕らわれており、黄奎はそれよりも先にすでに逮捕されている。また、二重傍線部②で示したように、捕らわれたことに対して李卓吾本では馬騰が「何の罪か」と発言しているのに対し、毛宗崗本では黄奎が「無実の罪だ」と大きな声で叫んでおり、非常に対照的である。毛宗崗本では大事な計画を愛妾に漏洩してしまう黄奎と、漢王朝に対して強い忠誠心を抱き、勇ましく戦った馬騰との対比がより明確になっていると、言えよう。

### (三) 第六十六回

曹操の横暴を止めるよう伏皇后の父伏完に手紙を送るため、穆順に手紙を託す場面である。

#### 【李卓吾本】

順泣曰「臣感陛下知遇大恩、敢不以死補報！臣即請行。」帝與了書、穆順藏于髮中、潛出禁宮、徑至伏完宅上、將書呈完。

#### 【毛宗崗本】

順泣曰「臣感陛下大恩、敢不以死報！臣即請行。」后乃修書付順。順藏書於髮中、潛出禁宮、逕至伏完宅、將書呈上。

傍線部で示したように、李卓吾本では「帝が手紙を与えた」とのみ記されているが、毛宗崗本では「伏皇后はそこで手紙を書いて穆順に渡した」と書かれており、手紙を渡す主語が帝から皇后に変えられている。わずかな差ではあるが、より伏皇后の主体性が強調されている表現と言える。

(四) 第六十六回

手紙が曹操に暴かれ、伏皇后を処刑すべく華歆らが宮中に押し入る場面である。

【李卓吾本】

少刻、尚書令華歆又引五百甲兵入、到後殿問宮人「伏后何在？」宮人皆推云「藏匿房中。」

【毛宗崗本】

少頃、尚書令華歆引五百兵入到後殿、問宮人「伏后何在？」宮人皆推不知。

伏皇后を捕らえようと探す華歆に対して、傍線部で示したように、李卓吾本では宮女たちが伏皇后は部屋の中に隠れていることをこぞって言っているが、毛宗崗本では知らないと言い張っており、全く異なる言動を取っていることがわかる。毛宗崗本は宮女たちの伏皇后及び漢王朝への忠誠心を表現していると考えられる。

(五) 第六十六回

華歆が伏皇后を見つけ出し連れ去る場面である。

【李卓吾本】

后披髮跣足、二甲士推擁而出。至外殿前、帝望見后、乃下殿抱后而哭。歆叱曰「魏公有命、可速行！」

【毛宗崗本】

后披髮跣足、二甲士推擁而出。原來華歆素有才名、向與邴原、管寧相友善。時人稱三人爲一龍。華歆爲龍頭、邴原爲龍腹、管寧爲龍尾。一日、寧與歆共種園蔬、鋤地見金。寧揮鋤不顧。歆拾而視之、然後擲下。又一日、寧與歆同坐觀書、聞戶外傳呼之聲、有貴人乘軒而過。寧端坐不動、歆棄書往觀。寧自此鄙歆之爲人、遂割席分坐、不復與之爲友。後來管寧避居遼東、常帶白帽、坐臥一樓、足不履地、歆棄書往觀。寧自此鄙歆之爲人、遂割席分坐、不復與之爲友。后一事。(百忙中忽接敘華歆生平、極似閑筆、卻不是閑筆。)後人有詩歎華歆曰、

華歆當日逞兇謀、破壁生將母后收。助虐一朝添虎翼、罵名千載笑龍頭。

又有詩讚管寧曰、

遼東傳有管寧樓、人去樓空名獨留。笑殺子魚貪富貴、豈如白帽自風流。」

且說華歆將伏后擁至外殿。帝望見后、乃下殿抱后而哭。歆曰「魏公有命、可速行！」

伏皇后を捕らえた後、毛宗崗本では新たに華歆と管寧のエピソードを挿入し、管寧の潔白さと比較して富貴にこだわる華歆の人となりを示している。太字で示したように、附せられた毛宗崗本の評には「忙しない状況の中で突然華歆の生い立ちを書くのは、無駄なことのように見えるが、その実無駄ではない」とあり、意図的に挿入していることが窺える。

以上の改変から、毛宗崗本では、皇后の反乱に対する意思の強さや、宮女たちの皇后及び漢への忠誠心が強調され、対照的に華歆の残虐性が強められていることがわかる。つまり、曹操に反旗を翻した人物に対して、毛宗崗本は漢王朝への忠誠心がより強調されるような改変を加えていると言えよう。

## 六 おわりに

『三国志演義』は蜀漢を正統とし、曹操を悪役として描く物語である。特に毛宗崗本ではそれぞれの人物の役割がより鮮明なものとなっており、曹操を「奸」絶として一貫性を持たせる以上、曹操の臣下たちに高い評価を与えること

はできない。しかし、毛宗崗はその中でも全ての人物を千篇一律に描いてはいない。「漢王朝への忠誠心」を比較軸として、程昱や荀彧、賈詡といったそれぞれの人物の立場が分かれるように綿密な改変を加えており、蜀漢への忠や義の尊重という主題が細かな所にまで表現されているという毛宗崗本の特徴が、曹操の臣下たちの人物描写にも表れていることが確認できるのである。また、その傾向は曹操に対して反乱を計画した人物にも言え、こうした毛宗崗本の緻密な配慮が、『三国志演義』の文学性を高めていると言えるだろう。

ただ、本稿において、毛宗崗本が『三国志演義』を改変するにあたって細部にまでこだわっているという一例を示すことはできたものの、このような改変は曹操に関わる人物だけに行われているのか、蜀や呉、また袁紹の臣下など広い範囲での調査を行い、より客観的なデータを得る必要がある。また、曹操の臣下についても、本稿では文官に対する調査に留まっており、所謂武官とされる人物は毛宗崗本でどう描かれているか、さらにはその異同が生じた背景など、検討すべき点は多く、今後の課題として考えていきたい。

## 注

- (1) 『三国志演義』の諸版本や出版競争については中川論『『三国志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八年）及び金文京『三国志演義の世界 増補版』（東方書店、二〇一〇年）などを参照。
- (2) 「吾以爲『三國』有三奇、可稱三絕。諸葛孔明一絕也、關雲長一絕也、曹操亦一絕也。（中略）有此三奇、乃前後史之所絕無者。故讀遍諸史、而愈不得不喜讀『三國志』也。」（毛宗崗本『三國演義』「讀三國志法」）
- (3) 注一前掲金文京『三国志演義の世界 増補版』三章「『三國志』から『三國志演義』へ」参照。
- (4) 仙石知子『毛宗崗批評『三國志演義』の研究』（汲古書院、二〇一七年）終章「毛宗崗本『三國志演義』の表現と時代風潮」参照。

(5) 書名を『李卓吾先生批評三國志』と題する版本には呉観明本や宝翰樓本、緑蔭堂本、蔡光樓本が挙げられるが、本稿はその中で最も古い呉観明本を用いる。また、比較の際には嘉靖本も用いたが、李卓吾本と明確な差が見られないものは特に記載せず、違いが見られた場合は注で示す。字体は繁体字で統一し、評については必要箇所のみ□で囲んで示した。テキストについては、嘉靖本は『古本小説集成』（上海古籍出版社、一九九〇年）、李卓吾本は『対訳中国歴史小説選集 李

卓吾先生批評三國志（ゆまに書房、一九八四年）、毛宗崗本は『三國演義』（上海古籍出版社、一九八九年）及び『三國演義 会評本』（北京大学出版社、一九八六年）をそれぞれ参照した。なお、ゆまに書房の李卓吾本は日本の蓬左文庫に所蔵される呉観明本の影印である。

(6) それぞれの章回数は全て毛宗崗本に準拠する。

(7) 「俗本之乎者也等字、大半齟齬不通。又詞語冗長、每多複沓處。今悉依古本改正、頗覺直捷痛快。」（毛宗崗本『三國演義』凡例）

(8) 嘉靖本は「苦諫」に作る。

(9) この場面は『三國志』「郭嘉伝」裴松之注引「傅子」に記載がある。本文において二重傍線で示した郭嘉の台詞について、発言の時期は前後しているが、内容は李卓吾本とほぼ同じである。「傅子」曰、初、劉備來降、太祖以客禮待之、使爲豫州牧。嘉言于太祖曰「備有雄才而甚得衆心。張飛、關羽者、皆萬人之敵也、爲之死用。嘉觀之、備終不爲人下、其謀未可測也。古人有言「一日縱敵、數世之患。」宜早爲之所。」是時、太祖奉天子以號令天下、方招懷英雄以明大信、未得從嘉謀。會太祖使備要擊袁術、嘉與程昱俱駕而諫太祖曰「放備、變作矣。」時備已去、遂舉兵以叛。太祖恨不用嘉之言。」（以降、『三國志』の引用は中華書局標点本に拠る）

(10) 毛宗崗本が自身の施した改変に対しても評をつけることに關して、注四前掲書にて仙石氏は「古本」三國志に基づいて校訂したという立場を取ることで、改変した文章に評を付け、自らの改変の意図を記すことを可能にしていると指摘している。（終章「毛宗崗本『三國志演義』の表現と時代風潮」）

(11) 毛宗崗本が劉備を「仁」の人として一貫して描き、物語の中心に据えていることは、仙石氏も注四前掲書で指摘している。（第一章「劉備の仁」参照）

(12) 郭嘉のこの場面は『三國志』「郭嘉伝」裴松之注引「傅子」に記載があり、郭嘉の話す内容は『三國志演義』にはぼそのまま継承されているが、ここでは荀彧は登場しない。「傅子」曰、太祖謂嘉曰「本初擁冀州之衆、青、并從之、地廣兵彊、而數爲不遜。吾欲討之、力不敵、如何？」對曰「劉、項之不敵、公所知也。漢祖唯智勝。項羽雖彊、終爲所禽。嘉竊料之、紹有十敗、公有十勝、雖兵彊、無能爲也。（中略）紹好爲虛勢、不知兵要、公以少克衆、用兵如神、軍人恃之、敵人畏之、此武勝十也。」太祖笑曰「如卿所言、孤何德以堪之也。」嘉又曰「紹方北擊公孫瓚、可因其遠征、東取呂布。不先取布、若紹爲寇、布爲之援、此深害也。」太祖曰「然。」

(13) 毛宗崗本は、第二十三回で「賈詡初隨李傕、後隨曹操、雖有知謀、不知順逆、故其言如此。」第五十九回で「賈詡前爲李傕策馬騰、今爲曹操策馬超、始終助逆、雖智謀不足取也。」と賈詡に対して批判的な評を附している。

(14) 例えは第十三回「侍中楊琦密奏帝曰『臣觀賈詡雖爲李傕心腹、然實未嘗忘君、陛下當與謀之。』」正説之間、賈詡來到、帝乃摒退左右、泣諭詡曰『卿能憐漢朝、救朕命乎？』詡拜伏於地、曰『固臣所願也。陛下且勿言、臣自圖之。』帝收淚而謝。」(毛宗崗本) というような場面が挙げられる。

なお、『三国志』「賈詡伝」裴松之注引「獻帝記」にも賈詡の獻帝に対する忠誠を示す発言が記されているが、先に挙げた『三国志演義』の場面のように獻帝と賈詡が直接関わるような記述はない。「獻帝紀」曰、傕等與詡議、迎天子置其營中。詡曰「不可。魯天子、非義也。」傕不聽。張繡謂詡曰「此中不可久處、君胡不去？」詡曰「吾受國恩、義不可背。卿自行、我不能也。」

(15) 華歆・邴原、管寧の三人の仲がよく、当時の人々が三人をそれぞれ竜の頭、腹、尾と見なして一龍と呼んでいたことについては『三国志』「華歆伝」裴松之注引「魏略」にも記述がある。「魏略」曰、歆與北海邴原、管寧俱游學、三人相善、時人號三人爲「一龍」、歆爲龍頭、原爲龍腹、寧爲龍尾。」ただし、華歆と管寧のエピソードは『世説新語』「德行篇」に記載があり、毛宗崗本はこの『世説新語』からエピソードを継承している。「管寧、華歆共園中鋤菜、見地有片金、管揮鋤與瓦石不異、華捉而擲去之。又嘗同席讀書、有乘軒冕過門者、寧讀如故、歆廢書出看。寧割席分坐、曰「子非吾友也。」」(引用は『世説新語』(上海古籍出版社、一九八二年)に拠る)

(16) 毛宗崗本のディテールにこだわる改変については、すでに引用している仙石氏の研究の他に、感情表現に焦点を当てた吉永壮介氏の『三国志演義』の「笑い」の位相について(『藝文研究』第一〇四号、二〇一三年六月)、『三国志演義』の涙の力学(『藝文研究』第一〇五号、二〇一三年十二月)、『三国志演義』の怒りの諸相(『藝文研究』第一〇七号、二〇一四年十二月)でも指摘されている。

(17) 出版された当時の社会の構造や状況から、通俗白話小説の受容、特に武官による受容について指摘する研究もあり(井口千雪氏の「明朝勲戚武定侯郭氏と文学」・「諸葛の如き」定襄伯郭登(『中国文学論集』第四六号、二〇一七年十二月)等参照)、本稿のような版本間の研究もそれぞれの時代の出版状況や受容層の観点から再検討する必要があるだろう。